

肉体外情報の功罪

医化学講座 山本 健

ヒトがチンパンジーとの共通祖先から分かれたのが約 500 万年前、原始の文字を発明したのが紀元前 3 から 4000 年であるから、ヒトは、ヒトとしての進化を歩み始めてから約 99.9%の間、文字を持たずに過ごしてきた。野生に近い生活を営んでいた太古の小集落には、比較的長生きをした年長者が居て、無毒の植物を見分ける知識や、野生動物や自然災害からの難を逃れて生き永らえるための様々な知恵を口承したに違いない。このような時代、年長者は生存に不可欠な情報が詰まった図書館の役割を果たし、集落の命運は年長者に依存していた。ニューギニアの奥地に文字を持たない部族がある。そこでは、歯を失い失明し咀嚼できない年長者のために、若年の構成員が食物を嚙んで柔らかくし食べやすいようにして栄養を与えている。文字の無い時代にヒトが身に付けた生存のための社会的戦略がそこにある (Diamond J, Nature 410, p521, 2001)。

ゲノムに刻まれた情報量はヒトへの進化の過程で増え続けたが、哺乳類に及んでその増え方は頭打ちとなっている。ヒトはライオンやオオカミと戦っても肉体的に勝利することが出来ない。このような状況下ではゲノム情報量の差は無いに等しく、ヒトは武器を作り罾を仕掛けるなど、脳の情報量の差を以って野生動物に対する優位性を保っている。欲張りなことに、さらにヒトは文字を発明し、ゲノムや脳にある体内の情報に加えて、その歴史の 0.1%の時間で夥しい量の情報を体外に蓄積した。それは現代では書物となって図書館に並べられ、あるいは記号となってサーバー内に収められてモニターを通して閲覧できる。ヒトのみが体外に無限の情報を保持することとなり、それが他の動物との圧倒的な力の差の源泉となって現在を生きている。

このヒトが保有する情報の総合力は、加速度的に技術を発展させ、ついに生物学的な長寿という形で具現化された。文字を持たない部族は、生存のための知恵を授かるために年長者を必要とし大事にした。現代人は、その知恵を年長者ではなく体外に蓄積された情報に求め、尋ねれば何でも教えてくれる「グーグル先生」を必要とし大事にしている。悲しいかな、「グーグル先生」が立派になればなるほどヒトの長寿化が進むという生物学的な矛盾をはらんだ社会が出来上がった。先進国を覆う *La mélancolie singulière* を解消する手立てを考えなければならない。